

〔直訳〕

- 28 そして 彼らは罵詈雑言を浴びせた 彼に そして 言った、
「あなたは 弟子 である あの方の、
だが私たちは モーセの である 弟子たち。
29 私たちは 知っている 次のことを
モーセに 話した 神は、
だがその者を 私たちは知らない どこから 彼があるか」
30 答えた その人間は そして 言った 彼らに、
「この点で 実に 驚嘆すること である、次のことが
あなたがたは 知らない どこから 彼があるか、
そして 彼は開けた 私の 目を。
31 私たちは知っている 次のことを
罪人たちに 神は 耳を傾けない、
しかし もし 誰かが 神を畏れて いたら
そして 彼の意思を 行っていたら、
その人に 彼は 耳を傾ける。
32 永遠から 聞かれなかった 次のことは
開けた 誰かが 目を 目の見えない人の 生まれつき。
33 もし ないとしたら この者が 神からで、
できないだろう 行うことが 何一つ。」
34 彼らは答えた そして 言った 彼に、
「罪のうちに あなたは 生まれた 全体が
そして あなたは 教えるのか 私たちに」
そして 彼らは投げ出した 彼を 外に。
35 聞いた イエスは 次のことを 彼らが投げ出した 彼を 外に
そして 見つけて 彼を 言った、
「あなたは 信じるか 人の子を」
36 答えた その者は そして 言った、
「そして 誰で 彼はあるか、 主よ、 ようにと 私が信じる 彼を」
37 言った 彼に イエスは、
「そして あなたは見ている 彼を そして 語る者が あなたと その者で ある」
38 だが彼は 言った、 「私は信じる、 主よ」。
そして 彼はひれ伏した 彼に。

〔新共同訳〕

1 さて、イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた。2 弟子たちがイエスに尋ねた。「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」3 イエスはお答えになった。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。4 わたしたちは、わたしをお遣わしになった方の業を、まだ日のあるうちに行わねばならない。だれも働くことのできない夜が来る。5 わたしは、世にいる間、世の光である。」6 こう言ってから、イエスは地面に唾をし、唾で土をこねてその人の目にお塗りになった。7 そして、「シロアム——『遣わされた者』という意味——の池に行つて洗いなさい」と言われた。そこで、彼は行つて洗い、目が見えるようになって、帰つて来た。8 近所の人々や、彼が物乞いであったのを前に見ていた人々が、「これは、座つて物乞いをしていた人ではないか」と言った。9 「その人だ」と言う者もいれば、「いや違う。似ているだけだ」と言う者もいた。本人は、「わたしがそうなのです」と言った。10 そこで人々が、「では、お前の目はどのようにして開いたのか」と言うと、11 彼は答えた。「イエスという方が、土をこねてわたしの目に塗り、『シロアムに行つて洗いなさい』と言われました。そこで、行つて洗つたら、見えるようになったのです。」12 人々が「その人はどこにいるのか」と言うと、彼は「知りません」と言った。

13 人々は、前に盲人であった人をファリサイ派の人々のところへ連れて行つた。

28 そこで、彼らはののしつて言った。「お前はあの者の弟子だが、我々はモーセの弟子だ。29 我々は、神がモーセに語られたことは知っているが、あの者がどこから来たのかは知らない。」30 彼は答えて言った。「あの方がどこから来られたか、あなたがたがご存じないとは、実に不思議です。あの方は、わたしの目を開けてくださったのに。31 神は罪人の言うことはお聞きにならないと、わたしたちは承知しています。しかし、神をあがめ、その御心を行う人の言うことは、お聞きになります。32 生まれつき目が見えなかった者の目を開けた人がいるということなど、これまで一度も聞いたことがありません。33 あの方が神のもとから来られたのでなければ、何もおできにならなかつたはずです。」34 彼らは、「お前は全く罪の中に生まれたのに、我々に教えようというのか」と言い返し、彼を外に追い出した。

35 イエスは彼が外に追い出されたことをお聞きになった。そして彼に出会つと、「あなたは人の子を信じるか」と言われた。36 彼は答えて言った。「主よ、その方はどんな人ですか。その方を信じたのですか。」37 イエスは言われた。「あなたは、もうその人を見ている。あなたと話しているのが、その人だ。」38 彼が、「主よ、信じます」と言つて、ひざまずくと、39 イエスは言われた。「わたしがこの世に来たのは、裁くためである。こうして、見えない者は見えるようになり、見える者は見えないようになる。」

40 イエスと一緒に居合わせたファリサイ派の人々は、これらのことを聞いて、「我々も見えないということか」と言った。41 イエスは言われた。「見えなかつたのであれば、罪はなかつたであろう。しかし、今、『見える』とあなたたちは言っている。だから、あなたたちの罪は残る。」

①構成

①a 目の見えない人の癒しを述べるヨハネ9章は次のような部分からなる。

1—7節	しるしとなる目の見えない人の癒し
8—12節	近所の人々による審問
13—17節	ファリサイ派による審問
18—23節	ファリサイ派による両親の審問
24—34節	ファリサイ派による再審問
35—38節	イエスが癒された人を探し、信仰告白へと導く
39—41節	しるしが示されているのに、理解しない者

①b ヨハネ9章には、重要な二つのポイントが述べられている。

②罪の問題

ヨハネ9章が罪の問題をテーマとしていることは明らかである。というのは、9章の冒頭では弟子がイエスに

この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか
と問い、結びではイエスが

今、「見える」とあなたたち（ファリサイ派）は言っている。だから、あなたたちの罪は残ると指摘しているからである。

目が見えないことは罪の結果だと見る弟子たちに対して、イエスは「神の業がこの人に現れるためだ」と言う。「罪」の捉え方が、当時の常識とイエスの間では大きく異なっている。常識から言えば、罪は否定すべきものである。しかし、罪を否定しようとするあまり、他人の罪を指摘することには熱心になっても、自分の罪は認めず、却って「罪を残す」結果に終わる。ところが、罪を赦す権能を持つイエスから見れば、罪は早く認めて、癒してもらわなければならない。イエスが41節で「見えなかったのであれば、罪はなかったであろう」と述べているように、人間の不完全さそれ自体は罪ではない。むしろ不完全さは癒されることによって、神の栄光を現す通路になりうる。しかし体裁を繕い、自分は完全だと言い張るとき、癒すために遣わされたイエスを拒絶してしまう。この頑なさが「罪」なのである。

③神のしるし

24—31節には、「知る」と「知らない」の組み合わせが3回も現れる。この組み合わせによって、イエスが誰かという問題が掘り下げられていく。

・第一の組み合わせ（24—25節）。ファリサイ派の人々は、安息日規定に基づいて、イエスは罪人だと「知っている」と述べる。これに対して癒された人は、イエスが罪人かどうかは「知らない」が、自分の身に起こった出来事は「知っている」と述べる。

・第二の組み合わせ（29節）。ファリサイ派の人々は、神がモーセに語ったことは「知っている」が、イエスがどこから来たかは「知らない」と述べる。彼らは、伝統を大事にして

いるから、得体の知れないイエスに神が働きかけるはずはない、と考える。人々の間ではイエスの出自が問題になっていた。エルサレムの人々はそれをガリラヤと考えるが（74）、イエスの答えは「上から」「父から」であり、「ユダヤ人が」知らないところからである（814）。ファリサイ派の人々はイエスの神的起源に疑問を投げかけている。

・第三の組み合わせ（30—31節）。癒された人はファリサイ派の人々がイエスがどこから来たか「知らない」のはおかしいと主張する。なぜなら、神は罪人には耳を傾けないが、神を畏れて神に従う人には耳を傾けると自分は「知っている」からだと言おう。24節「私たち」に対して、この人は目が開かれたキリスト者を代表するかのようには、「私たち」と語る。

この三度の組み合わせから分かるように、安息日規定に関する詳細な知識に立つファリサイ派の人々は、イエスは罪人であり、どこから来た人物か分からないと述べる。これに対して、癒された人は見えない目が見えるようになったという体験に立って、イエスは神から来た方だと主張する。ここに示されているように、知識が神の「しるし」を見えなくしてしまうことがある。

②癒しの出来事が指し示すもの（1—13節）

①しるしとなる目の見えない人の癒し（1—7節）

⑦目が見えない原因は罪にあると考える弟子たちに対して、イエスは「神の業がこの人に現れるため」（3節）だと答え、目の見えない人を癒す。この癒しは神の業がイエスを通して働いていることの「しるし」である（16節）。「しるし」であるから、単に肉体の癒しでは終わらず、癒しが指し示すものは何か、また癒した人は誰なのかという問いを人々に投げかける出来事となる。

①福音記者ヨハネは、シロアムの意味を「遣わされた者」と解説する。それは4節ですすでに述べられていたように、イエスが神から「遣わされた者」であることを強調するためである。神が遣わした方に出会うことによつて、目の見えない人の人生に転機が訪れる。

②近所の人による審問（8—12節）

⑦人々は、癒されたこの人がかつては本当に目の見えない人だったか、と傍観者的に議論するが、癒された人は自分から「わたしです」と答える。以前は物乞いをし、他人に依存して生きてきた彼が、今、自分に起こった出来事を証言することによつて、神との関わりの中で自己を確立し始める。

③ファリサイ派による審問（13—17節）

⑦ファリサイ派の人々は、安息日にイエスが癒しを行ったことを問題にする。ファリサイ派は、古い律法を再解釈して、生活の細かい点についてまで律法に従おうとした。従つて、医療も労働に他ならず、安息日に行つてはならないこととされた（ここでは具体的に、土をこねたことが労働だと見なされているようである）。これに対して、イエスは「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない」（マコニ27）と考える。安息日は人がいのちを取り戻すためにあるのだとすれば、癒しを通して目の見えない人がいのちを回復することは安息日にふさわしいことである。

④安息日規定にこだわらずに、目の見えない人を癒したイエスはいったい誰なのか、という問題をめぐってファリサイ派の間に「分裂」が生じる。一方では、イエスは安息日に労働したのだから、罪人だと考える人々がおり、他方には、この「しるし」には神の力が働いているはずだから、イエスは罪人ではないと主張する人々がいる。このような「分裂」を前にして、癒された人はイエスを「預言者」だと告白する。15節でイエスを単に「彼（あの方）」と呼んでいたこの人は、ここで、イエスに神の力が働いていることをはっきりと告白し始める。

③信仰告白へと導かれる（28―38節）

①ファリサイ派による再審問（24―34節）

⑦33節で、癒された人については、イエスは「神のもとから来られた」方だという告白に導かれる。「神のもとから来られたのでなければ、何もおできにならなかったはずです」という論法は3章2節にも用いられている。

⑧イエスが誰かを真剣に議論していたファリサイ派の人々は、いつのまにか、「ユダヤ人」（ヨハネはこの呼称を民族名としてではなく、イエスを受け入れない人々を指すために用いる）となってしまう（18節）、イエスへの信頼を告白する人を会堂から追放する。これはユダヤ人社会全体からの排除を意味した。

⑨ファリサイ派による審問は一世紀末のユダヤ教（ファリサイ派）による宗教裁判の様子を反映していると言われる。22節「ユダヤ人たちは既に、イエスをメシアであると公に言い表す者がいれば、会堂から追放すると決めていたのである」は、キリスト者がユダヤ教の会堂から締め出されたことを暗示しているが、これは85年以降に取り決められたことである（35節や一二42、一六2を参照）。

⑩このことから考えると、ヨハネ福音書は一世紀末頃に記されたと推測できる。ただし、ヨハネ9章に描かれた出来事が生前のイエスと無関係だと言い切ることはできない。ヨハネは、イエスの行ったしるしについての伝承を踏まえ、そのしるしを、当時の状況と重ね合わせて描き出していった。彼がそうしたものは、ユダヤ教からの迫害が激化する中にあっても、イエスを「主なるキリスト」と告白し続けるようにと呼びかけるためである。

②癒された人の信仰告白（35―38節）

⑪癒された人が追い出されたそのとき、それまで姿を消していたイエスが現れ、彼を見いだす。「彼を見つけて」は「投げ出した」と対比されている。（六37参照）。目の見えなかった人は、自らを癒した方との人格的な関わりの中で、「わたしは信じます、主よ」と告白し、「ひれ伏す」。彼は迫害という困難を通して、まことの礼拝へと導かれたのである。目の見えなかった人が視力を回復したのは、イエスを見て信じるためである。

⑫「人の子」は新約聖書では主に、イエスが自らを指して用いる呼称であり、ユダヤ教黙示文学では、メシア的人物を表すこともある。ここで「神の子」ではなく、「人の子」が使われたのは、この名が裁きと関係するからかもしれない（五27）。ファリサイ派は癒された人とイエスを裁く。しかし彼らこそ、まことの裁き手（人の子）であるイエスに背を向けることによって、裁かれている（三18）。

⑬「誰で彼はあるか、主よ」。これは不思議な問いである。なぜなら、癒された人はすでにイエ

スが預言者であり（17節）、神からの人である（33節）ことを知っているからである。ヨハネは、この箇所のテーマが「イエスは誰か」ということにあるので、それを浮き彫りするために、このような問いを書いたとも考えられる。

④ 光に照らされたとき

③ 34節でファリサイ派の人々が目の見えなかった人のことを「罪のうちに生まれた」と語るように、彼らは身体の先天的な障害は先祖の律法違反の結果と考えている。イエスの弟子たちも、目が見えないのは、本人か両親が罪を犯したからだという常識をまだ乗り越えられずにいた（2節）。しかし、イエスは、生まれたときから目が見えないのは、「神の業がこの人に現れるため」だと教える。イエスにとつて大事なことは、目が見えなくなった原因を詮索することではなく、苦しみからの解放に目を向けることである。神はどのような状況をも克服する力を持っていると知っているからである。むしろ、41節でイエスが指摘するように、罪は目の見えない人のうちに留まるのではなく、「見える」と言い張る者のうちに残る。

④ 共観福音書は癒しの奇跡を安息日問題とからませて語ることがある。13―17節を見ると、安息日に癒しを行ったことが批判されているが、しかし18節以後になると、安息日問題はわきに押しやられ、それに代わってイエスは誰かという問いが前面に出ている。この問いが9章の主題であるが、それは癒された人の答えがファリサイ派との討論が深まるにつれて変化することからも確かである。15節ではただ「あの方」とイエスを呼ぶにすぎなかった彼が、17節では「預言者」と答え、33節では「神のもとから来た」と述べ、さらに38節では「主よ」と告白する。光を受けて癒され、視力を回復した者が、光の中で徐々にイエスが誰であるかを理解してゆく。だが、イエスという光に背を向けて、陰に留まる者もいて、彼らは癒された人の告白を妨害する。

⑤ ヨハネは、迫害はイエスとの関わりが吟味されるときであり、そのことを通して、真にイエスに出会うことになる、と主張する。闇に留まっているのは頑なな人々の方であり、その彼らから追放を受けることは、闇からの決別であり、イエスに出会い、まことの礼拝をささげるための解放だと考えているのである。

⑥ 神から遣わされたイエスに出会い、その光に照らされたとき、目を開かれ神のもとに留まるか、あるいは光に背を向け闇の中に留まるか、人のあり方は二つに分かれる。光はそれを受け入れる人を変え、光を拒否する人を闇にとり残す。ヨハネ福音書では、父である神を啓示するイエスを信じないがゆえに、神との関わりを失った人間に、「罪（ハマルティア）」という語が使われる。この場合、罪とは「罪深さ」を表し、「真理」と対比される。イエスの癒しのうちに「神の業」（3・4節）を見ることができず、光として世に來たイエスを拒むユダヤ人たちが罪に陥っている（41節）。⑦ イエスが行う救いの業はしるしであり、そこに神が働いていることを指し示している。目の前の出来事にだけ捉われるのではなく、その向こうに神を見ることのできるかと、この物語は問いかけている。ファリサイ派の人々が行ったように、出来事の意味を自分の知識の中で見つけようとするとき、人はその理解の中に取り残され、イエスの行うしるしが指し示すものに出会うことはできない。このように人の子イエスによって闇に残される者の裁きが語られると共に、イエスのしるしに驚き、目を開かれてそこに神の業を見るように、神の救いを生きる者となるようにという招きもまた語りかけられている。